

平成 28 年度 南区自立支援連絡協議会 課題整理シート

	表 題	区の課題・検討事項	ワーキングで取組む課題	区で取組んでほしい事など	名古屋市に報告・提案など
相談支援連絡会		<ul style="list-style-type: none"> ① 外出しない、引きこもりの事例。支援の場に結びつけたいが、しっかり本人に関わる人的な資源が必要。 ② グループホームを希望しても条件にあるホームがなかなかない。 ③ 通所等での移動支援、行動援護の事業所が見つからない。 ④ 居宅介護から精神障害への対応が難しいということがあった。精神の方の対応ができるヘルパーが見つからない、精神とすることで受けてもらえないこともある。 ⑤ 基本相談が多い、受け持ち件数を各事業所や相談員のはんだんにゆだねたままで良いのか、基本相談を評価する仕組み作りなど必要ではないか。 ⑥ 土日や祝日に日中活動施設が利用できない。非定型がほとんどみとめられない。地域活動支援施設の数が少ない。 ⑦ 緊急に利用できる短期入所施設が見つからない。また新規でも見つからない。 ⑧ 土日や夕方など居宅介護が見つからない。 ⑨ 訪問看護と居宅介護等のヘルパーが同一時間内で支援ができない。 ⑩ 発達障害の特性がわかるヘルパーや放課後デイ等の事業所が少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ④精神の方への対応について研修や勉強会を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ① 基幹と連携しながら対応を考えていく等 ② グループホームの空き情報や事業所の特徴などを把握。ホームの運営面の課題を調査し把握する。 ③ 移動支援、行動援護ができそうな事業所の把握と情報提供 ④ 精神の方への対応について研修や勉強会を行う。 ⑤ 地域活動支援センターの実態や空き情報の把握。 ⑥ 市内外のショートステイの情報の把握。 ⑦ ヘルパーの空き情報の把握。 ⑧ 発達障害の研修。 	<ul style="list-style-type: none"> ②グループホームが足りない、空いていても障害特性等で入れない。 ⑨移動支援の空き情報が分かるようになると良い。通所の事業所が利用者を通所できる体制を整備する。 ⑩計画相談で基本相談が多くなっている。基本相談を評価し報酬に反映させる仕組みがあると良い。 ⑪土日や祝日に日中活動施設が支給決定の上限があり利用できない。地域活動支援施設の数も少ない。 ⑫緊急時のショートステイ施設が見つからない。新規も見つからない。 ⑬土日や夕方など曜日や時間帯で居宅介護が見つからない。 ⑭医療的なケアが必要な方等で訪問看護と居宅介護等と一緒に支援をすることが本人に必要な場合がある。
福祉関係事業所連絡会	人材育成 事業所間の交流 高齢化	<ul style="list-style-type: none"> ・事業所の人材の確保や職員の定着や育成について。 ・障害者の高齢化・重度化に伴い、事業所でどのように対応していくか。 ・南区は高齢者数が多い特徴があり、高齢の両親と障害の子供という家庭が多い。利用者の今後の生活できる場がみつからない。 ・重度の障害の利用者で基準該当生活介護を利用している人が多いが、介護度は高いが介護保険より単価が安い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・障害や技術研修を行い、スキルアップを図る。 ・事業所間の交流を図り情報交換をする。 ・介護保険の知識や介護技術を身に付けていく。 ・地域包括支援センター、ケアマネと事業所間の交流できる機会を設ける。 ・基準該当を利用している人の状況をアンケートなどで把握していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域でのつながりを持って行くため事業所を知ってもらえる機会を作っていく。 ・グループホームや入所の空き情報が解るようになっていく。 ・医療との連携 	<ul style="list-style-type: none"> ・福祉のイメージアップのための障害者理解、心も含めたバリアフリーの啓発 ・グループホーム不足。 ・生活介護基準該当の運営改善〈報酬・加算の見直し〉 ・地域包括ケアに障害を含めた検討
要援護者の防災を考える会	<ul style="list-style-type: none"> ・災害時、地域の方々と協力してのりきるため ・地域と繋がり障害児者の事を理解してもらうため 	<ul style="list-style-type: none"> ・防災訓練に障害児者の参加が少ない ・避難所運営側、地域の方々の障害理解がなかなか進まない ・学区によって要援護者への関心度が違う 	<ul style="list-style-type: none"> ・SOSカード、あんしんカードなどを作成し、それを身に着け防災訓練等に参加を重ねることで、地域の方々に障害や病気の事を理解してもらう機会としたい。また、制作過程の中で、お互いの障害の現状を知っていく機会としていきたい。 ・地域の方々と一緒に考える機会を作る・福祉関係事業所を訪問等してもらうなど、各自が考えるきっかけを作る取組みを行う 	<ul style="list-style-type: none"> ・障害児者が参加しやすい防災訓練等を企画して欲しい ・啓発活動や地域と交流する機会等を増やしてほしい 	<ul style="list-style-type: none"> ・名古屋市として各区統一した SOS カード、あんしんカードのようなものを作成して欲しい。

	表 題	区の課題・検討事項	ワーキングで取組む課題	区で取組んでほしい事など	名古屋市に報告・提案など
児童の生活を考える会	<ul style="list-style-type: none"> ・障害児をめぐる環境の現状確認やその課題を検討する ・福祉関係機関と教育関係機関との意見交換、交流を行い、子どもたちの生活について総合的に考える場とする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育、福祉の連携。子どもたちの姿を共有するための共通の課題 ・引き続き学校の参加を促していく。(記述方法 要検討) ・人材確保、人材育成。通所事業、また、地域において子どもたちの発達を支援できる人材の育成。 	<ul style="list-style-type: none"> ・イベントの共同開催：職員間での交流による、人材育成。 ・他事業所の子どもたちを見ることにより視野を広げる(ケース検討の活性につなげる)。学校にも案内を出し、学校以外の子ども達の姿を見てもらう。 ・ケース検討：子ども達の姿を捉え、実践に生かせる取り組み。 ・参加者の検討：学童などの障害児と関わる人たちとの連携 	<ul style="list-style-type: none"> ・発達や制度などの研修会(事業所連絡会) ・地域の方たちとのつながる機会づくり(子どもを見守る体制など) ・今すぐの対応はWGとしても難しいので、順次検討。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校との連携について各所の意見を知りたい。
重度障害者入院時コミュニケーション支援	<ul style="list-style-type: none"> ・入院時コミュニケーション事業の周知 ・対象者の拡大 ・医療機関との連携 	<ul style="list-style-type: none"> ・南区は障がいの重度化・高齢化が進み、入院するリスクはどんどん高くなっている。 ・重度障害者入院時コミュニケーション支援の認知度の低さ。 ・対象者が限られている。 ・実際の支援状況は制度で支援できる範囲が限定されているため、事業所からの持ち出しをせざるをえない状況で、ホームやヘルパー事業所の職員がボランティアのように支援している実態がある。 ・平成30年に「重度訪問介護の訪問先の拡大」が始まる中、重度障害者入院時コミュニケーション支援はどうなっていくのか。訪問先の拡大というものの、意思疎通支援に限られているという課題をどう解決していくのか。といった課題や問題点が多々浮彫になっている。 ・平成30年に重度訪問介護の制度が見直され、「単身者」という制限はなくなるものの、まだまだ対象者の制限や支援内容の制限など課題は多い。 ・また移動支援・行動援護利用者、障害児等他の制度には当てはまらない方々にも対応できる制度をめざしていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・南区内の実態を明らかにする。そのために、居宅・ホーム・通所施設にアンケートを配布し対象者の年齢から入院時にどのように対応しているのかなど割出、出てきた課題をまとめ、数値化し名古屋市に挙げていくようにする。 		<ul style="list-style-type: none"> ・左記の結果を行政にしっかり報告。 ・南区発信の制度の提案など。 ・なぜ入院中、医療ではない関わりが必要なのか。それは障がいのある方は特に退院後ADLの低下が著しいことや、単調な日々ではめりはりもなく時間の概念も捉えにくい。その場合にいつも関わっている職員が入院中支援に入ることで少しでもめりはりのある生活を送ることがADL低下防止につながり、退院後の普段の生活に戻りやすくなるのではないかと。
地域福祉力を伸ばそう	<ul style="list-style-type: none"> ・地域に向けた心の健康の啓発活動 ・講演会等を通じた「福祉」「障がい」についての学習の場の提供 ・支援者だけでなく地域住人にも障がいがある方たちの『応援団員』になってもらう 	<ul style="list-style-type: none"> ・社協を中心に、ボランティアグループや地域コミュニティが活発に動いている中、福祉や障がい、特にこころの健康への活動があまり表面化していない。 ・地域でお互いを支え合って生活していくために必要な知識や、それを得る機会が少ない。 ・自分たちが住んでいる地域の困りごとについて考え共有する機会が少ない。また同時に課題の解決方法について考える機会も少ない。 ・(こころの健康や障がい福祉に対して)興味はあるが活動としては参加できていない人達をどう取り込んでいくか。 ・(こころの健康や障害福祉に対して)興味・関心がない人たちにどうアピールしていくか 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域に住む人が何に困っていてどんなことを知りたいかニーズの把握をする。ニーズにあった学習の機会の創出。 ・地域での現状の取り組みを把握する。取り組みが共有できるような機会を設定する。 ・地域住民が関心を持ちやすいテーマを把握する 	<ul style="list-style-type: none"> ・分野問わず様々なコミュニティとのつながりをもつ 	